



レッド・データ・アニマルズ

インド、インドシナ 4

絶滅の危機にさらされた
2580種の動物たち。
彼らを窮地に追い込んだ
私たちが今できることは何だろう。

第3回配本 第①巻—インド、
インドシナ

奇美・沖繩

南西諸島に
生息する種を
掲載

講談社

定価：本体4,700円(税別)

IUCN

本書の売り上げの一部は、
野生動物を保護する
ために使われます。



【動物世界遺産】レッド・データ・アニマルズ

講談社創業90周年・IUCN(国際自然保護連合)創設50周年記念企画 IUCN公認 / WWFジャパン協力

解説

マークの意味

CR

[Critically Endangered]
絶滅寸前種

CR

近い将来、高い確率で野生では
絶滅に至る危機にある。

EN

[Endangered]
絶滅危惧種

EN

絶滅寸前種について、近い将来、
野生では絶滅する恐れがある。

VU

[Vulnerable]
危急種

VU

野生では中期的に
絶滅する恐れがある。



哺乳類
MAMMALS

130



鳥類
BIRDS

166



爬虫類
REPTILES

197



両生類
AMPHIBIANS

209

離乳に好適である。授乳期間は短く、数ヶ月で終わるらしい。秋に減水が始まると支流の個体は本流に戻り、交尾期に入る。多くの小型ハクジラ類の例からみて、妊娠期間は11ヵ月前後と思われる。子は生後1年で110~120cmに成長するが、その後の成長は明らかではない。全長が199cm(28歳)と200cm(16歳)の雄は性成熟していたが、体の成長はまだつづいていた。さまざまな淡水魚、エビ、二枚貝などを食しており、胃からは全長3.6~11.8cmのコイ科の魚類が多数見出された。しかし、食料組成は季節や場所により異なる可能性がある。30~40cmのナマズも食べるし、アヒルを攻撃するのも目撃されている。

信頼できる生息頭数の推定はないが、各地で個体数が減少しつつある。その原因にはダムの建設による移動の阻害と生息環境の破壊、灌漑による水位低下、密漁、漁業による混獲、食物となる生物の減少などが指摘されている。腐臭のついた本種の脂肪は、釣り漁業の撒き餌の臭い付けとして効果が高いので漁業者の需要がある。バングラデシュでは肉は食用に販売されることがあるといわれる。(粕谷)

●クジラ目 カワイルカ科

インダスカワイルカ

- 【学名】 *Platanista minor*
- 【英名】 Indus River Dolphin (Buhlaan)
- 【サイズ】 ガンジスカワイルカとの違いは明らかでない
- 【分布】 パキスタンのインダス川中流の約600kmの範囲

EN

ガンジス川とインダス川とは鮮新世(530万年前から200万年前)にはひとつの大河であったし、その後も両河の間では流路の争奪が繰り返されたので、本種とガンジスカワイルカ(*P. gangetica*)が隔離されてからの時間はあまり長くないらしい。また、両種は外形では区別できないし、骨学的にも個体レベルでどこまで区別が可能か疑問とする意見もある。そのため、本種はガンジスカワイルカの一亜種であるとする見解も少なくない。その見解に従えば、本種の学名は *P. g. minor* となる。

19世紀末には、本種はインダス川の河口からおもな支流をすべて含めて、1400km上流のヒマラヤの丘陵地帯入り口にまで分布していた。1930年代には灌漑を主目的とするダムや堰堤の建設が始まり、かつてのインダスカワイルカの分布域は16個の堰で分断され、川の水は大部分が砂漠の灌漑農

業に消費されるようになった。1987年から1996年の調査で生存が確認されたのは、インダス川中流のスクルーグドゥ、グドゥータウンサ、タウンサーチャズマの堰堤で挟まれた区間、合計600kmの流れに限られていた。これ以外の区間に若干の個体が生存するとしても、本種の総生存数は決して1000頭を超えないと信じられている。イルカは増水期に堰を越えて下流側に押し流されることがある。元に戻れない一方向の移動である。メンバーを失う上流側にとっては損失であるし、落ちた先では子孫を残せない死滅回遊となる可能性もある。生活史は何も知られていない。

1968年に初めて本種が透明な水の中で観察された。小さいタンクの中でこの盲目のイルカが絶えず音響探測をしていたのは当然としても、イルカが体側を下にして横泳ぎをするのを見て科学者は驚き、本種に特有の泳ぎ方だと信じたいらしい。海のイルカも、水底近くを泳ぐときや、タンクが小さいために円を描いて泳がなければならないときには横泳ぎをする。本種が横泳ぎしかできないとか、ほかのイルカは横泳ぎをしないと考えるのは正しくないようだ。

1960年代のパキスタンでは本種を捕獲する漁業者があり、肉を食用にしていた。釣り餌の添加物として本種の脂肪の需要は今でも高く、密かに高価で取引されているといわれる。本種の捕獲はパキスタンの法律で禁止されており、故意であれ偶然であれ処罰の対象となる。このため、刺し網などの漁具による事故死の情報や死体の標本が集めにくく、生活史研究の障害になっている。都市廃水や農薬による汚染の影響も憂慮されている。(粕谷)

長鼻目 ゾウ科

●長鼻目 ゾウ科

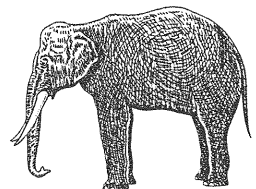
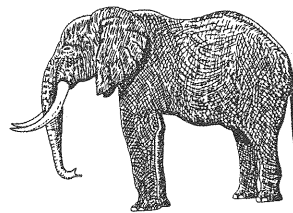
アジアゾウ(インドゾウ)

- 【学名】 *Elephas maximus*
- 【英名】 Asian Elephant (Indian Elephant)
- 【サイズ】 頭胴長5.5~6.4m 体高2.5~3.2m
尾長1.2~1.5m
体重5.4t(大型の雄の平均)、2.72t(雌の平均)
最大6.7t
- 【分布】 南アジア、東南アジア

EN

【カラー】 p.32

鼻と上唇が伸びた「鼻」をもつ。「鼻」は骨がなく、約4万本の筋肉からなる。嗅覚がよく発達し、先端に鼻孔が開き、指状突起で細かいものまでつ



アフリカゾウ(上)とアジアゾウ(下)

長鼻目

ゾウの仲間。陸上(生きた動物)のなかではもっとも大きい。上唇と鼻が一体化して長く(長い)自由に動かせるよう進化した。この鼻を使って、物をつかみ、水を飲み、呼吸をし、臭いを嗅ぎ、仲間とコミュニケーションをとる。植物のほとんどすべての部分を食べる。

●アジアゾウの分布と個体数

インド	20000~24000
ネパール	50~85
ブータン	60~150
バングラデシュ	280~350
スリランカ	2500~3000
ミャンマー	5000~6000
タイ	1500~3000
ラオス	2000~4000
カンボジア	約2000
ベトナム	300~400
インドネシア(スマトラ島)	2500~4000
マレーシア(マレー半島部)	800~1000
マレーシアとインドネシア (カリマンタン島)	500~2000
総個体数	35490~49985

(1995年の報告による。ただし、ラオス、カンボジア、カリマンタン島の数字は精度が高くない。)

まむことができる。四肢は円柱状で、肘と膝の関節は下方に位置し、指間にある厚い組織が足裏となり、音をほとんどたてずに歩ける。前肢に5本、後肢に4本の小さな蹄がある。ちなみにアフリカゾウ (*Loxodonta africana*) の蹄の数は、前肢4本、後肢3本である。アフリカゾウの雌の牙は口の外に出るが、アジアゾウの雌では出ない。アフリカゾウは背よりも肩が高いが、アジアゾウは背がもっとも高い。耳介はアジアゾウのほうがかなり小さい。体表にはしわが多いがアフリカゾウに比べてなめらかで、とくに鼻のしわの隆起は弱い。体色は灰色が基本。白変個体が見られ、これは地域によって人々から畏怖、神聖視される。

おもに森林に生息し、草地と水飲み場が欠かせない。主食は草で、根茎、樹皮、木の小枝や葉、果実などを1日に体重の4%ほど食べる。農作物を荒らすこともある。採食しながら移動するが、現在では広域の移動ができず、インド南部やスリランカでの季節移動の範囲は30~40km。ふつう、2~3日以上は同じ場所に留まらない。1日1回70~90ℓ以上の水を飲み、水浴びし、巧みに泳ぐ。採食には鼻を使う。血縁関係のある雌と子で母系群をつくり、水場や移動時などには200頭以上に及ぶこともある。発情した雌がいる母系群には、優位な雄が留まる。互いに優劣を認知し、戦いはまれ。615~668日の妊娠期間の後、1子を産む。新生児の体重は50~150kg。雌は9歳で性成熟することもあるが、17歳から18歳での初産が多い。食物などの条件の良いときで2年半から4年、ふつうは5~8年に一度、妊娠出産する。寿命は60~80年とみられる。

1995年に報告された各国の個体数は別表のとおりだが、急激な減少がつついている。

4000年ほど前から象牙細工の材料として狩猟の対象となっていた。3100年ほど前から戦争に戦象として使われ、のちに材木運搬などにも利用された。近代以降、森林伐採、開墾などのために生息地域は縮小、分断されている。牙のある雄が減ったため、牙目当ての密猟よりも生息環境の破壊のほうが深刻な問題である。ベトナムとカンボジアでは戦争による打撃も大きかった。ミャンマーなどでは、運搬や雑役のための野生群の捕獲がいまだに行われていて、その過程で多くの個体が死んでしまう。中国では骨灰が胃薬とされるので、密輸入されている。一方、農地荒らしなど人間との摩擦も多く、インドではゾウによる事故で毎年100~150人の死者が出ている。スリランカでも年

間30人が死亡し、「農民の武装が必要」との意見に賛否両論がある。各国でさまざまな保護策が講じられているが、人間と生息域が重なっている所も多く、完全な実施はむずかしい。(小原)

奇蹄目 バク科

●奇蹄目 バク科

マレーバク

- [学名] *Tapirus indicus*
- [英名] Malayan Tapir
- [サイズ] 頭胴長180~250cm 肩高90~105cm
尾長5~10cm 体重250~540kg
- [分布] ミャンマー、タイ南部、カンボジア、ベトナム、マレーシア、インドネシアのスマトラ島

VU

[カラー] p.40

バク類は楔形の体形で密生した植生内を動くのに適している。上唇と鼻は癒合して伸び、よく動く。鼻孔は先端にある。目は小さく、耳は丸い。四肢はやや短め。前足の第3指が大きく、第5指は小さく、第1指は退化し外見上は4本指。尾は短い。盲腸は大きい。同じ奇蹄目のウマ類とは白歯の形が違い、サイ類のように角もない。本種の最大の特徴は、白と黒のツートンカラー。頭から肩にかけてと四肢は黒く、ほかの部分は白い。おもに夜に行動するので、体の白い部分だけが目立って体形がはっきりせず、トラもバクだと気付かないといわれる。頸の皮は厚さが2~3cmもあり、固い。嗅覚と聴覚がよく発達する。

川辺や沼沢地周辺の雨林を好む。たえず動きながら、水分の多い植物を少しずつ食べ歩く。基本は樹葉食で、ときに果実を食べる。森林周辺部や二次林近くで採食することを好む。追われると深い茂みに逃げ込み、茂みの中でもかなり速く走れる。また、水中に逃げ込み、潜水して身を守ることもある。母子以外は単独でくらす。雌は390~407日の妊娠期間の後、雨季直前の4月から5月に1子を産む。新生児は体にウリのような模様があり、生後6ヵ月頃までに成獣と同じ白黒の体色になる。子は少なくとも6~8ヵ月間、母親と同居。性成熟は2年半から3年。

タイの山岳民族は本種を、神がほかの動物を作った残りの材料で作ったとみなし、狩猟の対象としなかった。ミャンマーなどほかの地域でもおおむね同様で、1930年代まではかなりの数が生息していたが、生息地である森林が伐採されて急速に減少した。分布域も分断されつつある。スポーツ・

奇蹄目

ウマ、サイ、バクの仲間。1本または3本の蹄のついた指が発達し、中指にあたる第3指がもっとも大きくなる。植物をすりつぶすための臼歯。走行を容易にするために爪が退化した蹄、楕形の胴体。ほぼ同じ長さの前肢と後肢などは、ワンヤンカなどの偶蹄目(2本または4本の蹄のついた指をもつ)と共通の特徴である。偶蹄目との大きな違いは、反芻する胃をもたないことで、代わりに長い盲腸があり、その中の微生物の力を借りて植物の繊維質を分解する。サイのように皮膚が角質化した場合を除き角をもたない。3800万年ほど前までは世界でも主要な草食動物だったが、現在はオーストラリア以外の限られた地域に約20種が残るのみである。

ハンティングや、ペット用としての違法な捕獲もみられる。マレーシアでは法的に厳しく保護されているが、保護地域内の個体数の見積もりは約370。タイでも南部と西部の保護区に20~30ずつ、イスラム教徒にはブタに似ているとして食用にされないスマトラ島の国立公園にも約200しか残っていない。カリマンタン島では化石は出土するが、不確実な目撃記録が1929年までであった後の情報は無い。(小原)

奇蹄目 サイ科

●奇蹄目 サイ科

インドサイ

- [学名] *Rhinoceros unicornis*
 [英名] Great Indian Rhinoceros
 [サイズ] 頭胴長310~420cm 肩高170~200cm
 尾長60~80cm 角長30~60cm
 体重1500~3500kg 雌はやや小さい
 [分布] パキスタン、インド北東部、ネパール、ブータン

EN

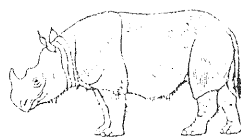
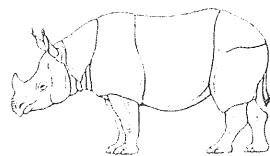
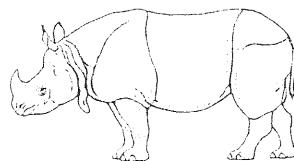
[カラー] p.38

アジア最大のサイ。サイ科のなかでは、頭が長く、鼻先から前頭にかけて窪みがあり、角が1本で、下顎の犬歯が牙状によく発達している。攻撃するときは、角を使わず、この犬歯でイノシシのように突きかかる。肩の後ろ、腰、大腿部、四肢の付け根には、皮膚のひだがある。体側と四肢には、鋸のような隆起が点在する。外見は鎧をまとったようだが、皮膚は厚いか鎧のような硬さはなく、虫に刺されることもある。耳介の縁、尾の先端以外は毛が生えていない。体色は暗い灰色で、ひだの縁はピンクがかかる。

沖積地平原の沼沢地と草深い草原を好み、そこに、さまざまな方向に草のトンネルのような通路をつける。川や丘に沿った深い低木林にもすむ。ネパールなどでは、乾燥林にすむ。ふつうは単独でくらす。行動圏内に糞場をもつ。糞は、泥浴び場や水場などに、ときに70cmの高さに積み上げられる。水場などの共有地では数頭が集うが、争いは起こらない。しかし、なわばりに至る私道に入りこむ個体は、なわばりの主から攻撃される。食物は、おもに草、それに果実や小枝、農作物、さらにホテイアオイなどの水生植物など。妊娠期間は462~491日で、体重55~70kgの子を1頭産む。新生児の体重は生後1年で倍になる。雌は3年半から4年半で成獣の大きさになる。性成熟は飼育下で雌が5~7年、雄は7~9年かかる。飼

育下での寿命の記録は47年。

17世紀までは、現在のパキスタン、ネパール、インド北部、ブータン、ミャンマーに広く分布していたが、現在ではインド北東部のアッサム州とネパール、ブータン、パキスタンに生き残っているにすぎない。本種の個体数は、1960年代は600~800、1970年代は1000~1100、1990年代は約2000。1997年はインド約1600、ネパール約500、ブータン約20、パキスタン2で、ここ40年間は漸増傾向にある。インドではカジランガ国立公園、ネパールではロイヤル・チトワン国立公園などの保護地を中心に密猟防止など保護に努めている。サイの角は漢方の解熱剤、強精剤、さらにはエイズ治療の秘薬の原料として珍重されてきたことから、密猟が絶えなかった。この漢方薬目当ての密猟問題は37ページのコラムで、詳述する。(小原)



インドサイ(上)
 ジャワサイ(中)
 スマトラサイ(下)

偶蹄目 イノシシ科

●偶蹄目 イノシシ科

コビトイノシシ

- [学名] *Sus salvanius*
 [英名] Pygmy Hog
 [サイズ] 頭胴長50~71cm 体高25~30cm
 尾長2~3.5cm 体重6~10kg
 [分布] インド、ブータン

EN

[カラー] p.41

きわめて小型のイノシシ。耳は小さく楕円形で皮膚が裸出し、尾はごく短く総毛がない。体色は褐色ないし黒褐色。頬と背には剛毛が生え、体つきは丸まっている。乳頭はイノシシ属がふつう6対なのに対して3対。また、ほかの種より前臼歯が1対少ない。そのため、イノシシ属のなかにコビトイノシシ亜属(*Porcella*)を本種のためにもうける考え方もある。子には縞模様がある。

おもに川辺の低木交じりの草原に生息する。ここは草丈が2~3mに及び、身を隠すのに適している。4~20頭(ふつうは4~6頭)の小家族群でくらし、雌雄が入る巣を一年中使用する。雑食性で、根や地下茎のほかに鳥の卵や、昆虫などさまざまな種類の小動物を食べ、それらを摂取する過程で、かなりの量の土も食べるといわれている。発情期は1月で、100~120日の妊娠期間を経て、モンスーン初期の4月から5月に出産する。1産2~6子。寿命は10~12年。

かつては、ヒマラヤ山脈南東部の山すそに広く分布していたが、20世紀初頭にはほとんど目撃さ

偶蹄目

ラクダ、イノシシ、カバ、ウシ、シカ、キリンなどの仲間。世界各地に生息しているが、オーストラリアの偶蹄目は人間とともに海を渡ったものである。2本または4本の蹄のついた指をもつ。植物をすりつぶすための臼歯、走行を容易にするために爪が退化した蹄、褥形の胴体、ほぼ同じ長さの前肢と後肢などは、奇蹄目と共通の特徴である。奇蹄目との大きな違いは、植物の繊維質を分解するために反芻する胃をもっていることで、この消化器官によって草原を中心にさまざまな環境に適応できるようになった。ただし、イノシシやカバの仲間は反芻胃をもっていない。

どうぶつ せかい いき ざん
動物世界遺産
レッド・データ・アニマルズ——④
インド、インドシナ

発行日……2000年7月11日 第1刷

編著者……おばらひでお小原秀雄 / うらちとまさのり浦本昌紀 / おわたのよし太田英利 / まついまさみ松井正文
発行者……野間佐和子
発行所……株式会社 講談社



〒112-8001 東京都文京区音羽2-12-21
電話……編集部—03-3944-1293 / 販売部—03-5395-3624 / 製作部—03-5395-3615
印刷所……凸版印刷株式会社
製本所……大口製本印刷株式会社
用紙……ガイニック株式会社 / 王子製紙株式会社

定価はカバーに表示してあります。

- 本書の無断複写(コピー)、転載は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
 - 添丁本・乱丁本は、小社書籍製作部までにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
- この本の内容についてのお問い合わせは、総合編集部までお願いいたします。

©KODANSHA Ltd., 2000, Printed in Japan
N.D.C. 480 214p 30cm
ISBN4-06-268754-2 (総C)